

女子部が行く！

◇ 学会探訪記 ◇

第2回 理事会 —それは「何かしゃべらないと帰れない会」だった!?!—



📁 レポーター 坊農真弓（国立情報学研究所）

先月から加藤理事の旗振りでこのコーナーが始まった。会誌の後ろのほうでちょこちょこ日常コラムを書かせていただいている私たち女子部の面々が、学会を探訪し、そこで起こっていることをリアルにレポートするコーナーだ。

恐る恐る理事会へ

研究者としてまだまだ大成していない若輩者の私が情報処理学会ほど大規模な学会の理事会に足を踏み入れるなんて思ってもみなかった。もちろん私は理事ではないので理事会には出られない（理事以外の陪席は認められていない）。そんな私のために、喜連川会長、中田副会長、徳田副会長、妹尾総務担当理事は理事会前に意識合わせをする場への潜入を許可してくださった。2015年4月28日のことである。

次の3つの戦略について伺った。喜連川体制の理事会では（1）ジュニア会員制度の導入、（2）理事会の若返り、（3）技術者認定の仕組み作りを中心に行った。現在日本の平均年齢は46歳である。そして本会会員の平均年齢はそれをさらに上回る48歳だ。会長、副会長、理事の面々は学会の老齢化を食い止めるために上記の（1）と（2）を試みた。

ジュニア会員制度

ジュニア会員制度は大学学部3年生以下の学生が対象だ。なんと小学生も対象だというから驚きである。会費が無料な上に会誌をオンライン閲覧でき、

さまざまな学会イベントにお安く参加できる。小さいうちから情報処理に親しむ姿勢を持つなんて、パソコンに触れたのは大学生になってからという私から見れば、なんとも夢みtainな話である。

理事会の若返り

次に理事会の若返りのために、喜連川会長は「若手やんちゃ枠」を設定し、初音ミクなどで一躍有名になった産総研の後藤真孝氏を新世代担当理事に任命した。この件について、よくよく会長にお話を伺ったところ、当初は「会長の土下座付き」という条件付きだったらしい。つまり、この理事のやんちゃが過ぎた場合、会長が土下座して謝って回るというなんとも太っ腹な提案だったのだ。学会を若くするには、「まずは若手を信頼しよう！」という気持ちがベースにあったそう。また会長は「これまでの情報処理学会は石橋を叩いて叩いて渡ることもしなかった。叩くのは1回でとにかく渡ろう。石橋を叩いて割れてしまったらそのとき考えたらいい。やんちゃするのは若手の役目、何かあったら責任をとるのは会長の役目、人生と同じでなるべく多くの失敗を早くすることが学会を強くする」ということもおっしゃった。若手やんちゃ枠のおかげで2015年の全国大会では、分野を越えたインパクトを有する19名の気鋭の研究者を招待し、各5分の持ち時間で弾丸トークを行うイベント「IPSJ-ONE」を開催するに至った。本イベントはニコニコ生放送で配信され、15万viewを記録した。今後のやんちゃ具合もますます期待したい。

★本稿に出てくる役員は取材当時の役職名となります



図-1 右から、徳田副会長、中田副会長、下間事務局長、妹尾理事、喜連川会長、坊農

技術者認定の仕組み

昨年（2014年）日経 IT Pro にも記事が掲載されたのだが、本会は国際標準規格にのっとった IT 技術者向けの新しい資格制度を発足させた。名称は「認定情報技術者（CITP：Certified IT Professional）」である。これは中長期戦略として提案されている。学会という基本的にボランティアで構成された組織が、技術を持つ人々に社会的ステータスを与えるという事例はこれまでに聞いたことがない。ほかの2つの提案に比べ、これはすぐに成果が出る提案ではないが、学会が社会にじわじわと影響を与える枠組みを築きつつある。

細かいことをとことん細かく丁寧に

理事会前の意識合わせで最も印象的だったのは、本会のトップたちが会員数の増減から学会賞の細かな名前のつけ方まで、とても詳細に議論していたことである。20年続いていた会員減を食い止めるという大きな課題に向かうには、次々にさらなる戦略を練っていく必要がある。会長らの細かいことをとことん細かく丁寧に議論する姿勢はある種の気迫を感じるものだった。

論文誌担当事務

理事会前の意識合わせ潜入後、理事会が開かれる会場に移動し、論文誌担当の相澤理事にインタビューさせていただいた。各理事は自分で担当を選ぶわけではない。論文誌担当になった相澤理事は、いま改めて組織図を見てみると適材適所にカラーのある理事が配置されていることに驚くそう。理事になりたてのときに会長から、「自分が理事になって学会のここが変わったと胸を張って言えるように」とアドバイスいただいたそうである。相澤理事は、「付録データつきジャーナル」を立ち上げるという大きなミッションを掲げている。この試みが実現したら、テキストベースの論文にマルチメディアデータをつけるなど、投稿の枠組みが大きく変わる可能性がある。情報処理学会という場を使って研究の伝播の仕方が変わるというのは、とてもわくわくする仕事である。

企画担当事務

次に企画担当の新田理事にインタビューさせていただいた。私は別の小さい学会で企画担当をしているので、企画が学会全体を見渡すオールマイティの能力を求められるという現実を少し知っている。新



図-2 理事会の様子

田理事は総務と財務と事務局と連携しながら、仕事を進めている。また、本会は昔からシステムを自作できる人が揃っているの、昔に作った古い学会システムがそのままヘリテージとして残っていることがあるらしい。学会システムの入替えプロジェクトは、財務担当の鳥居（前）理事とそれを引き継ぐ岩寄（現）理事を中心に進行中であり、企画担当も重要なミッションとして首を突っ込んでいる。単に新しいシステムを入れるだけでは問題は解決しない。システムを変えるというのは作業フローを変えることであり、人の動き方が大きく変わることにつながる。まさに縁の下の力持ちとして仕事をする新田理事はまだまだ本会に対してやり残したことがあるらしい。とめどないその情熱は今後みなさんにじわじわと届くだろう。

そして理事会本番へ

理事会に陪席できない私のために、加藤理事が理事会の様子を写真撮影してくださった。喜連川体制では、理事会は「何かしゃべらないと帰れない会」として運営されているらしい。さらに妹尾理事からは、「評論家的意見は求められていない」「提案するなら自分でやる」といった理事間の共通理解があると伺った。これからどんなバトルが繰り広げられるのだろう。

今回理事会の潜入を経験して非常に強く印象に残ったのは、「全理事がみな同じ方向を向いている」ということである。会長の強烈なリーダーシップのもとに学会をより魅力的にしようという気持ちがあふれんばかりの理事会だった。

（2015年6月10日受付）

